

問題・解答
用紙番号

15

の解答用紙に解答しなさい。

国 語

〈受験学部・学科〉

法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、
看護学部、農学部(食農ビジネス学科【文系型】)

問題は100点満点で作成しています。

I 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(五五点)

ガリヴァーは日本にも来た。ご存知だったろうか。一八世紀初頭のことだ。有名な『ガリヴァー旅行記』には一七〇九年にガリヴァー船長が来たことになっている。スウィフト(一六六七―一七四五)が描いたガリヴァー船長の冒険譚に日本のことが紹介されている。

一八世紀の日本は鎖国のなかにあつた。ガリヴァーはその閉ざされた江戸期の日本を訪れた。ここではガリヴァーの目を通して、鎖国期日本の学的状況を考えることにする。近世江戸期の学的遺産といつてもよい。当然ながらシヤタイには近代日本の歴史学にかかわる問題も入っている。

住人を踏み潰しそうになった小人の国(リリパット)での話、さらには巨人の国(ブロブデインナグ)や空飛ぶ国(ラビユータ)での話、あるいは馬人の国(フウイヌム)での物語、等々、旅行記には夢がいっぱいである。だが、原作者スウィフトの創作にかかるこの作品は、他方では現実の社会への強烈な諷刺に満ちているともいう。その点ではここに登場する日本も当然ながら諷刺の対象だったことになる。結論を先取りすれば、⁺宗教を棄てたオランダを相手とする日本への冷笑^A、こんなところだったかもしれない。

ガリヴァーが「ラグナグ王国」から一五日の航海をへて、「ザモスキ」に到着したのは、五月の下旬のことだったとある。ここから「エド」(江戸)へ入り、「皇帝陛下」に謁見、「ナンガサク」(長崎)へと護送されたのが六月九日。ここからオランダ船で故国イギリスへ帰ったことになっている。この間、彼が見聞したもの、それが日本への「冷笑」の中身でもある。

ところで、ガリヴァー船長ことスウィフトの日本に関する知識は、おそらくオランダ経由だったろう。イギリス国教会の司祭でもあつた彼は、そのオランダの功利主義を嫌つたらしい。

「オランダ人に課せられている例の儀式、つまりあの『踏絵』の儀式を行うことを私に対して免除するという、陛下の特別のご承諾があればありがたい」

とのガリヴァーのことは、他ならぬスウィフト自身のものでもある。交易のためなら信仰も棄てるオランダ人への痛烈な皮肉が見え隠れする場面だろう。「信仰と交易とは別」、とのオランダ的功利主義は「踏絵」を拒否しなかった。要はその功利的思考に「感電」させられている国、これがガリヴァー（愚者）の眼を通じて描き出された「日本」の姿だったのかもしれない。愚かしきオランダを唯一の交渉相手とする愚かしき日本、その様子を「愚者」ガリヴァーを介して略述した内容ともいえる。前述の「冷笑」の中身とはこんなところだろう。ついでながら、

「天主教信者の日本に出入するを絶たんとして、新法を設け、外商上陸の時、十字架を出して、これを踏ましめたり、……爾采和蘭人はこれを踏み、難色なし……」（『日本西教史』第二〇章）との語りからもわかるように、「例の儀式」についてのガリヴァーの知識は史実からも、さほど遠いわけでもなかった。

ここでガリヴァーを持ち出したのは、彼が軽蔑してやまないオランダ、そのオランダの学問（蘭学）について語りたかったことによる。「これを踏み、難色なし」との評に象徴されるオランダ流の即物主義が、わが国の学問に与えた影響という問題である。

ガリヴァーの時代は、^B日本で「オランダ学」が誕生しつつあった。かりにヨーロッパをオランダに代表させた場合、その蘭学なり洋学なりの特質は何であったのか。ここで考えたいのは、ガリヴァーが語るオランダの経済至上主義にたいする諷刺についてである。^{*}ウエーバーの説を借りるまでもなく、西欧の新教国家群が、カトリック諸国に比し強大になり得たのは「富」の是認にあった。

「オランダの地に田野を開いたのみでは満ち足りず、かれらは帆をあげて地球をめぐり、太陽の照りわたる限り遙かな不思議の国々を訪れた。（中略）利益のわれらを導くところ、あらゆる海に、あらゆる岸辺に、利得を恋し世界の港を、われらは探る」

これはオランダ最大の詩人フオンデルの詩の一節である。オランダ貿易業者の偉業をたたえたものだという。一七世紀半ばの作品ながら、ここには、「海商人」オランダの人々の「富」「利得」への願望が表明されている。「利得を恋し」の思想ともいうべき内容だ。

鎖国期の日本は、このオランダと出会うことで、「西洋」にふれた。

「西洋」とは「文明」の代名詞だった。日本は西洋を文明の象徴とみなし、これを吸収した。「閉の体系」ともいうべき鎖国下、出島という「点」を通じての吸収だったが、開国にともなう「開の体系」下の日本は西洋を「面」として受け入れることになった。

ところで、オランダ人の新教についていえば、^②教会をバイカイとせず個人が神と信仰により結合するところに特色があった。その意味では、プロテスタントは、精神の自律を前提としたところから出発した。この自律は個人^③の責任にカンゲンされるが故に、時として極端に敬虔な信者もいれば、

逆の場合もある。スウィフト的な理解に立つならば、踏絵を例にオランダ人を揶揄するガリヴァーは、もちろん前者に、そしてオランダ人は後者という区分けとなる。カネ（富）がカミ（信仰）に優先する時代、それが近代に接する一面だとすれば、オランダはその先駆けだったことになる。

カネを尺度とする合理の思想は、当然のことだが、「事実」を重視する。蘭学・洋学の特質はここにあった。この事実の重さに江戸期の日本が驚いたのは、『解体新書』あたりということになる。五臓六腑に象徴される中国的観念からの解放である。「事実」が「観念」を打ち破りつつある時代、ガリヴァーが来た時期の日本はそんな時代だった。

学問が科学として芽吹くには、この「事実」を素直に受け入れる態度が必要とされる。目に見える現実を現実として受け入れる。ものを等質において量的に見る観点でもある。商人の論理といってもよいかもしれない。近世の日本がオランダを「学」という側面においても受けとめることができたのは、商人を介して富という共通のルールの受信盤が用意されていたからだろう。

指摘されているように近世江戸期は町人の時代でもある。市場経済が全国規模で広がった時代だった。鎖国により国内の経済システムが発展しつつあった段階だったともいえる。^C オランダを受容し得た主体的条件はここにあった。この国の学問、とりわけ歴史学の在り方を論ずるには、このあたりのことも確認しておかねばなるまい。

とすれば、蘭学的気質が排した「観念」の学（儒学^{*}）についてふれておく必要もあろう。^D 蘭学と儒学の両者が、わが国の知的潮流にどう作用したのかという問題である。構図上からは守旧的思想の権化ともいべき儒学・朱子学から、開明的思想の象徴である蘭学・洋学への移行という流れとなる。この点をふまえるにせよ、一見 a に位置づけられるこの両者の関係である。

人間のあるべき姿、国家の進むべき道、まさに「しすべき」という価値体系に裏打ちされた学問、これが朱子学だった。「親に孝、君に忠」に示されている秩序の体系であろう。近世江戸期の思想界の基幹は、この朱子学にあった。その点では、学問としての歴史もまた規範化された道学的秩序からは自由ではなかった。別のいい方をすれば、歴史学はそれ自体として成立しておらず、特定の目的への奉仕の学問だった。④ 実用主義的な見方にもツウテイする。歴史を「鑑」と見、過去の経験を将来の手本と解する考え方に近い。教条主義に立脚した正義（イデオロギー）の体系、これが朱子学だった。大雑把に朱子学の本質について略記すればこんなところだろうか。

こうした表現をすれば、朱子学とはカビ臭い、封建的要素に満ちた学問と考えられやすい。たしかに、朱子学が封建教学としての側面を有していたことは事実である。だが、江戸期の学的遺産からすれば、この朱子学の存在も「近代」への移行には必要だった。その意味では蘭学に対比されるべき朱子学も、近代史学の培養に少なからず寄与したことは疑いない。「物に即し理を窮める」（格物致知）との観点は、しばしば指摘されるように合理的思考の土壌ともなった。

もちろん、近代的「合理」と同一ではないが、そこには実証的・実験的態度も要請されたわけで

朱子学が近代史学の培養に寄与した側面とは、このことと無関係ではない。

朱子学の有した合理的・開明的側面、これもまたガリヴァー以後の日本は持っていた。江戸期における知的潮流において、この朱子学と一見 a に位置する蘭学が矛盾なく同居し得た理由もほぼ諒解されよう。「近代ヨーロッパ」受容の知的基盤については、こうした場面にも留意すべきなのかもしれない。

蘭学でも朱子学でも「開明」という回路で判断すれば、そこに共通するものは、合理の思考だった。その合理の思考（開明思想）の受信装置は江戸の「胎内」にもあった。江戸期の「体質」自体が右に見た合理の思考を受け入れるべく変わりつつあったからである。ガリヴァー以後の一八世紀は、特にこの傾向が顕著になる時代だった。

ところで、この一八世紀はわが国でも『ガリヴァー旅行記』に似た書物を登場させている。

F 『風流志道軒伝』。有名な平賀源内（一七二八—一七九）の作品である。この人物についてのショウサイは語る必要もあるまい。

風来山人とも号した源内は、蘭学の徒であった。藩（高松）の命で長崎に留学したこともあり、オランダの博物学への造詣も深かった。江戸に出て林家の門人に列したが、観念の学よりは実学を源内は志向したらしい。和製『ガリヴァー旅行記』ともいうべき、この作品の刊行は宝暦一三年（一七六三）のことだった。おおよそ田沼時代のころだ。オランダ学が江戸の胎内で成長しつつあった時期である。源内はその見本だったと解することができる。

世間をすねた江戸の講釈師深井志道軒の伝記というポストで書きあげられた『風流志道軒伝』には、ガリヴァーの世界に対比できる類似性が指摘できる。羽扇を使用しての異国めぐりの構想は、「空飛ぶガリヴァー」といつたところだろう。作中の主人公浅之進（志道軒）の指導・助言者として風来仙人という源内らしき人物も登場する。同書を一読すれば、わかるように、現実社会への諷刺・批判はなかなかのものだ。

飛行自在の羽扇を授けられた浅之進は吉原をはじめとする遊里をめぐり、続いて諸外国へと出かけ、大人国・小人国・長脚国などの珍国や天竺・阿蘭陀・朝鮮・中国その他をめぐり故国日本へ帰るといったストーリーである。

「例の羽扇に打ち乗りて、蝦夷・琉球はいふに及ばず、莫臥爾・占城・蘇門答刺・淳泥・百兒齊亞・莫斯科米亞・琶牛・亞刺敢・亞爾默尼亞・天竺・阿蘭陀を始として……」

『風流志道軒伝』の一節だが、ここに挙げられた国々を、和製ガリヴァーの浅之進は訪れたことになっている。ちなみに、これらの国名は『和漢三才図会』や『増補華夷通商考』にも見えるものだという。スマトラ・ボルネオ・ペルシヤ・モスクワ・アルメニア等々の地名・国名も散見し、興味深い。

源内の非凡なる発想の源は、実学に裏打ちされた好奇心だった。ここには情報量の限界はあるに

しても、オランダ経由の世界観が垣間見える。長崎での蘭学、江戸林家での儒学も源内の強烈な個性の前には b ものがあるが、^{とび}輻の^み人ならではの皮肉は、スウィフトに一脈通ずる。「賢者あれども登庸^{（明）}こと知」らない世間への批判、スウィフトに対比されるべき源内の心底をのぞけば、こんなところだったのかも。

それにしても江戸の胎内に「ガリヴァーの世界」を見出し得るのは、おもしろい。開明論者源内の多才さが、人文・社会科学の方面に接ぎ木されるには、さらなる時間が必要だったが、合理的思考は日本にも源内に代表される人物を生み出した。

（関幸彦『「国史」の誕生』一部改変）

- * ガリヴァー旅行記……アイルランドの作家、ジョナサン・スウィフトが書いた風刺小説。架空の主人公であるガリヴァーが世界中を旅する。一七二六年に出版された。
- * ウェーバー……マックス・ウェーバー（一八六四―一九二〇）。ドイツの社会学者。十六世紀に生まれたキリスト教派の新教（プロテスタント）では、労働に禁欲的に励むことによって利益を生み出すことが、信仰の上でも正当化されたと指摘した。
- * 儒学……中国の伝統的な学問で、日本でも政治、思想に大きな影響を与えた。朱子学はその学説の一つで、江戸時代に広まった。
- * 林家……りんげ。江戸時代に代々朱子学の学説を伝えた儒学者の家。

問一 二重傍線部①～⑤と同じ漢字を含むものを、次のア～エのうちからそれぞれ一つ選びなさい。

① シヤテイ

- ア 公園の風景をシヤセイする
- イ 相手に直接シヤザイする
- ウ 外部からの情報をシヤダンする
- エ 予防接種のシヤをする

② バイカイ

- ア 新聞などのバイタイを活用する
- イ 裁判のバイシン員となる
- ウ 海外の企業をバイシユウする
- エ 多額のバイシユウ金を支払う

③ カンゲン

- ア ドルを円にカンサンする
- イ 父が来年カンレキを迎える
- ウ 熱中症への注意をカンキする
- エ 部屋の中の空気がカンする

④ ツウテイ

- ア 環境問題に関するテイゲンを行う
- イ 書類をテイサイよくまとめる
- ウ 完成するまでのカテイを楽しむ
- エ 期日にトウテイ間に合わない

⑤ ショウサイ

- ア 彼の演技はセイサイを欠いている
- イ 給与のメイサイを提示する
- ウ お金をサイゲンなく使ってしまう
- エ 岩をファンサイして利用する

問一 波線部 i ～ iii の言葉の本文中の意味として最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | |
|--------|------------|-----------|
| i 揶揄する | ii 権化 | iii 造詣が深い |
| ア からかう | ア 威力を持ったもの | ア 関心が高い |
| イ 批判する | イ さらに進んだもの | イ 精通している |
| ウ 見下す | ウ 姿を現したもの | ウ 勉強熱心である |
| エ 無視する | エ 代表的なもの | エ 身近にある |

問二 空欄 a (二箇所) ・ b に入る最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | |
|--------|----------|
| a ア 主従 | b ア 色あせる |
| イ 対極 | イ 目を見張る |
| ウ 同等 | ウ きびすを返す |
| エ 本末 | エ 聞きしに勝る |

問四 傍線部A「日本への冷笑」とはどういうことか。次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 信仰よりも利益を上げることを重んじるオランダとだけ交易し、その考えに染まっている日本をさげすむこと。
- イ オランダだけを相手とする鎖国期の日本を、巨人の国や空飛ぶ国のような国と同様に不思議な目で見ること。
- ウ ガリヴァーが江戸から長崎への護送中に見聞した、宗教を棄てた日本の様子が愚かであるとして相手にしないこと。
- エ 交易のためなら信仰も棄てるオランダ人に対して、「踏絵」の儀式を強要する日本をさめた目で見ること。
- オ 日本がイギリス人には「踏絵」の儀式を課す一方で、キリスト教を棄てたオランダと交流するのを馬鹿にすること。

問五 傍線部B「日本で“オランダ学”が誕生しつつあった」とあるが、当時の日本における「オランダ学」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 個人が神と信仰により結合すると考えるオランダ人の学問は、日本人も理解しやすかった。
- イ 富を是認する経済至上主義を諷刺するオランダの学問が、日本では歓迎された。
- ウ 文明の象徴である西洋の代表であるオランダの学問を、日本は受け入れる他なかった。
- エ 日本はオランダの学問を通して、その特質である事実を重視する姿勢を受け入れた。
- オ 従来の中国的観念から解放されるために、日本ではオランダの学問が推奨された。

問六 傍線部C「オランダを受容し得た主体的条件はここにあった」とあるが、「ここ」が示す内容について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 近世日本では、富の優先という世界共通のルールが海外からもたらされていた。
- イ 近世日本では、科学により現実を現実として受け入れる態度が備わっていた。
- ウ 近世日本では市場経済が広がり、商人の論理でものを見る観点が存在していた。
- エ 近世日本は町人の時代でもあったので、学問と同じように経済も重視されていた。
- オ 近世日本では、ヨーロッパの学問をもとに歴史学のあり方が論じられていた。

問七 傍線部D「蘭学と儒学の両者」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 規範化された道学的秩序に縛られていた儒学であったが、蘭学の影響を受けて合理的・開明的な側面も持つようになった。
- イ 儒学は古めかしく封建的な学問であったが同時に合理的な側面も有していたのであり、蘭学とともに近代化の土台となった。
- ウ 儒学が有していた合理的思考は蘭学における近代的な合理的思考とは異なっていたため、矛盾が生じることとなった。
- エ 守旧的な思想である儒学の学者は、国家の進むべき道を裏打ちするものとして開明的な思想である蘭学を受け入れた。
- オ 儒学では過去の経験を将来の手本とする教条主義に立脚していた点において、蘭学と共通する思想を有していた。

問八 傍線部E「『風流志道軒伝』。有名な平賀源内（一七二八―一七九）の作品である」とあるが、筆者は平賀源内についてどのように述べているか。次のア～オのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

- ア 儒学も蘭学も学んだ平賀源内は合理的な思考を持ち、『ガリヴァー旅行記』を著したスウィフトにも対比することができる。
- イ 『風流志道軒伝』は『ガリヴァー旅行記』を翻案した作品であり、平賀源内が蘭学を通して文学も学んでいたことが分かる。
- ウ 観念の学よりも美学を志向した平賀源内は、儒学を学ぶことをやめて蘭学を学びに長崎に留学したと推測されている。
- エ その旺盛な好奇心から非凡な発想を生み出した平賀源内は、『風流志道軒伝』において現実社会を諷刺し批判している。
- オ 平賀源内の『風流志道軒伝』は蘭学の見本とされ、そこから日本で蘭学が成長していくことになったと考えられる。

II

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

思考、ということでもすれば^a頭を痛めるような難しい思考に注意がいつて、日常的な「思い」が見落される理由の一つに言語化の問題がある。日常的な「思い」はその主題が些細な日常茶飯のことであることに加えて、ほとんど言語化されずに一過してしまうので把握し難いのである。それに対して難しい思案事は言語化されていることが多く、数学の証明等の思考はそれを言語化すると自体がその「証明」なのである。

だが言語化に乏しいのは「思い」に限らずに、¹人間の経験一般が言語化されることが稀なのである。街を歩いている時、次々と展開する知覚風景を言語化することはまずないだろう。道の右側に電柱がある、そこに貼つてあるのは何々銀行の看板で少しまだらにはげている。その下の方に雑草が二・三本生えていて埃をかぶっている、……このような言語的報告を口にしないのは勿論のこと内心で^{つばき}呟くことさえないだろう。また自分の動作を一々言語化することもないだろう。ましてやそういう時にふと「思った」ことを言語化することは誰もしない。

一括して言うならば、経験の現場でその経験を言語化する——経験の実況放送——ことはまずないのである。

その理由を私は次のように推測する。

まず言語とは何よりも通信のためのもの、特に、自分が居合せない状況、つまり、自分が自ら知覚できない状況についての情報をやりとりするためのものである。だとすれば、自分が居合わせ自身で知覚している状況を自ら通信するということには何の意義もない。従って自分の経験の言語による実況放送は的はずれ (pointless) である。

もちろん限られた局面ではそのような実況放送も意味を持つ。斥候や伝令の復唱、正副操縦士の間の計器読みの呼唱、列車運転士の呼唱、金銭授受での呼唱、等々における確認のための言語化はエラー防止のためのものである。しかし、そういった場合以外では言語化は高々 A の他は用がない。これが自分の経験現場での言語化が稀である理由であると思う。

思考もその一つだが、一般に経験を言語化する、というとき一つの基本的誤解がある。それは、まず言語化されていない生のままの経験があつて、それを言葉で「表現」するのが言語化だという誤解である。だから、言葉はつけたしで言葉になる前にこそ純粋な経験があるのだ、と思われがちなのである。

しかしそうではない。言葉以前の経験、この場合は言葉以前の思考なるものがあるとしてもそれは全く無定形な^{アモルファス}経験、無形の思考でしかないだろう。なぜならばそのような経験や思考は一切のかくかくしかじかを言うことが不可能なものだからである。

そんなことはない、例えば、何について考えていたのかと問われれば (自問でもいい) かくかく

だと答えられるのだ、と言われるかもしれない。その通りである。だがかくかくだと答える時にその経験なり思考なりはその答えるという形で（また答の範囲で）言語化された経験や思考になったのである。そのように答えることは、裸の思考を（部分的に）言語化することではない。その思考がその範囲で言語化された思考になることなのである。言語化以前の裸の思考なるものは現像されない生フィルムと同様にまだ姿を持たない思考であり、まだ生れない未生の思考なのである。

だが上述したように、思考や経験の時点でそれらが実況放送的に言語化されることは稀である。ただ後刻その思考や経験が憶い出されるときに言語化された思考や経験になるのである。それはおかし、思考や経験が憶い出される、というとき、その憶い出される当の思考や経験があるはずではないか、そしてそれらこそ言語以前の生のものではないか、と言われよう。この反論はいかにも当然であるがやはり事実誤認の上に立っている。上述の表現以前の経験という誤りと想起を再体験だとする誤りとは同腹の双生児的誤謬である。ある経験や思考を憶い出す、ということはその経験や思考を再体験することではなく、それらを言語的に想起することであり、言語的に想起することがまさにそれらが言語的経験や思考になることそのことなのである。

これまで想起というものが全く誤解されてきた。想起とは過去の現在経験の再生または再現であると誤って解されてきたのである。だが食事の想起とは今一度食事の経験をかすかに持つことではないし、夢の想起は改めて軽く今一度夢を見ることではない。しかしこの想起の誤解は根強く我々を支配している。この容易に抜き難い誤った先入見から自由になるためには想起というものを改めて成心なく観察することが必要である。まず想起は知覚と並ぶ経験の根本様式であつて知覚の一番煎じなどではないことに気付くだろう。知覚が現在を経験する経験であるのに対して想起は過去を経験する様式である。古物になった現在経験の再経験ではなくして過去それ自体を直接に経験するのが想起である。何かを見たり聞いたりするのではなく、何かを見た、何か聞いたという過去形の直接的な初体験なのである。一方、知覚には視覚聴覚などの五つの感覚があるのに対して、想起には唯一つ「言語覚」とでもいうべきものがあつて五感を主導する。つまり、想起されるのは、感覚的情景は副次的で根幹は何が見えた、何が聞いたといった、言語的物語りなのである。時として想起が難渋する時はこの物語りを努力して制作せねばならない。例えば夢の想起などはそういう場合である。

以上でした想起の観察は当然思考経験にも適用される。思考の最中、つまり思考の現在経験は概して言葉に乏しく黙しがちである。しかし思考の想起経験では思考は言葉に溢れた過去形の物語りになる。これが、思考が言葉になるということに他ならない。

昨夜の夢を今日憶い出す。それは今日昨夜の夢を今一度みることではない。今眠つてなどはおらず、目覚めて昨夜の夢を憶い出しているのである。それは、初めああしてそれからこうなつた、とその夢を言語的に想起することである。そうしてその夢を言語的に確認し、言語的に確定するので

ある。

それによって昨夜の夢は言語的になる¹のであり、その夢を見たということが確定するのである。実際、「今夢を見ている」という現在形は余程変わった珍しい場合の他は意味がない。通常の場合に意味があるのは「昨晚夢を見た」という過去形なのである。そしてそれは言語的にかくかくしかじかの夢を今憶い出しているということに他ならない。もし一切のかくかくを憶い出せないような場合には昨晚夢を見たということそのことが確認されないのである。それと同様に、言語化以前の思考、一切のかくかくを憶い出せないような思考は、私は思考したというそのこと自身が確定しない、そのような思考であるといわねばならない。確かにそのような思考を私がしたかもしれない。しかし、何とはしれない、ああでもなく、こうでもないといった風な思考、いやそんな思考があつたともなかつたとも言えないような思考、ただ何となしに何かであつたような思考、そのような思考をなおも思考と呼び続ける必要はもうないだろう。少なくとも本稿ではこれ以後言語化された思考だけを扱うことにする。

以上で述べた誤解を繰返して言えば、まず先に言語化を一切受けていない純生の経験²というものがあ³り、その経験を言語で表現するのが言語化だという、私が「表現の誤り」と呼びたい誤解である。この表現の誤りは決して経験の言語化に当たつてのみ生じる孤立した誤解ではなく非常に広い範囲のあちこちに現れる様々な誤解のいわば基本型ともいべきものである。特に、この表現の誤りに接して上述の想起の誤りが続く。

その表現の誤りの最初がいわゆる言語芸術に見られるのは当然であろう。詩や歌を作るとき、初めに詩想とか歌想とかという非言語的な「表現したい」思いがありそれを次に言語で「表現する」のが作詩、作歌であると。これは詩人や歌人自身がそう思っている形跡がある誤解である。

同様に、画家や作曲家はこれまた非言語的な画想や楽想をまず心に抱き、それをキャンバスの上に絵具で、あるいは五線譜の上に音符で「表現する」のだという誤解がある。

また、「言葉では言えない、言葉では言い表せない、感動とか思い」、こうした言い方はどこにでも見られる。「表現の誤り」はこのように広い範囲でわれわれを呪縛しているのである。この誤りに対する私の論駁は帰謬法的である。

仮に表現の誤りのいう所が正しく、表現以前の非言語的経験⁴が言語で表現されてSという叙述になったものとしよう。このときSはEを正しく表現しているかいないかが言えなければならないだろう。とにかく、SとEとは比較可能でなくてはならない。しかし、全く非言語的な経験Eと叙述文Sとは一体どうして較べることができるのか。例えば、一つの知覚風景、今見えている自分の部屋の知覚風景とそれを叙述した文とを較べられようか。今見えている風景の中で第一何を、どの部分に言及すべきなのか。本棚に本が並んで見えているが、それを漠然と「本の列」と描写すべきなのか、五・六冊はその見えている題名を叙述すべきなのか、あるいは一切を無視すべきなのか、

つまり正しい叙述は何なのか皆目私にはわからない。言語を一切含まない知覚経験を言語文と比較するなどとは不可能なことである。ましてや微妙な捉え難い気持ちの動きや思いの揺れなどを言語描写と較べるなどは全く不可能である。だから「表現する」などは **X** にすぎない。

実は、経験の言語化とはその経験の言語的想起なのではないか。これが「表現の誤り」の代りにとりた⁴い私の代案である。

まず先にも述べたように、言語の中核的機能は私が居ない場所の知覚風景の情報伝達である。だから私の知覚現場、知覚の真最中の実況放送的言語描写は元々の言語の根本機能からみて無意義であつたのである。だが一つの経験が過ぎ去つて過去の経験になつたときそれを言語的に描写することは決して無意義なことなどではなく、立派に情報を伝えてくれる。実際、経験を後刻想起することは普通人々が「反省」といつていることに他ならず、反省は経験の大切な情報源であることに疑いはない。この反省的想起においてある経験が過去経験として言語的に確定される。それは何か言語以前の過去の経験が言語化されるのではなくある過去経験がいわば創出されるのである。それは古い経験の再出や再現ではなく一つの新しい過去経験が **B** 出現するのである。例えば、滑走路を歩いていつて階段を登つて飛行機に乗つた。座席に^お坐つて飲物を頼んだ、そのジュースはひどく甘かつた。そのうち窓に薄汚ない工場が見えた、^{うん}云々。このように過去形動詞によつて叙述される過去経験が想起されるとする。この想起にあつて過去形を現在形に変えたような経験は一切登場しない。ジュースの味とか工場風景とかの現在経験は全く無いし、その現在経験の再現はおろかその断片すらない。ジュースの味がしたことを想起するのであつて、その味がすることを想起するのではない。だからこの反省的想起において過去の言葉少ない経験が言語的に表現されるのだという「表現の誤り」は全くのお門違いであり、いわば想起において言葉豊かな過去経験が原初的に経験されるのである。知覚において現在経験が原初的に経験されると並んで想起において過去経験が原初的に経験されるのである。だから、この想起が意識的になされるとき、**Y** というのが似つかわしいのである。

確かに想起というからは先立つ現在経験があり、それが想起されてその記憶像が出現するのだという伝統的な考えは根強い。その記憶像を言葉で表現する、というのがそのまま表現の誤りになることは明白だろう。

(大森荘蔵『思考と論理』一部改変)

問一 波線部 a・b の語の本文中の意味として最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

a ともしれば

b 成心なく

ア ある状態になることを仮定するさま

ア あらゆる可能性を捨てることなく

イ うまくいくことを願うさま

イ 実証されるまでは断じることなく

ウ そのようになりがちであるさま

ウ 個人的な感情を入れることなく

エ 注意が行き届かないさま

エ 特定の見方や立場にとらわれることなく

問二 空欄

A

 ・

B

 に当てはまる最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

A ア 再体験

B ア 断片的に

イ 自己確認

イ 原初的に

ウ 実況放送

ウ 知覚的に

エ 情報源

エ 反省的に

問三 傍線部 I 「人間の経験一般が言語化されることが稀なのである」の理由として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア 自分自身が居合わせている状況をわざわざ言語で自分に通信するのは無意味だから。

イ 言語化による確認は自分自身のエラーを防ぐ役には立たないから。

ウ 自分が経験している日常の一つ一つのことを言語化するのは負担が大きいから。

エ 私たちは自分の経験を言語化することができるという考えは誤りだから。

オ 言語は他者との通信のためのものであり自分の内面を表現するものではないから。

問四 傍線部2「表現の誤り」とあるが、筆者は何を誤りとしているか。次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 表現とは、まだ言語化されていない経験を言語化することであり、その言語化は正確でなければならぬとの認識。

イ 私たちは「言葉では言えない」と言いつつ、言葉では言えないことを言語で表現しようとする。

ウ 言語化とは、まず表現したい非言語的な経験や思いがあり、それを言語で表現することであるとの考え。

エ 言葉以前の経験や思考は言葉で表現されることによって初めて形をなすが、その表現されたものと元の経験等と同じであるとする考え。

オ 文学や美術、音楽といった芸術における表現と、日常生活における他者との通信のための表現とは別物であるという認識。

問五 傍線部3「想起の誤りが続く」とあるが、想起について筆者はどのように捉えているか。次のア～オのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

ア 想起とは、過去にした経験を現在において再生し再現することである。

イ 過去の経験は、言語的に想起されることによって確定される。

ウ 想起とは、過去を再体験することではなく、過去を初めて体験することである。

エ 現在の経験は知覚によって想起されるが、過去の経験は言語によって想起される。

オ 想起の際に過去形を用いるのは、その経験は現在のことではないと示すためである。

問六 空欄

X

 に入る最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア あるまじき鈍重さ

イ 思い上がった絵空事

ウ おもしろくもない冗談

エ 抜け出し難い呪縛

オ 広く知られた誤謬

問七 傍線部4「私の代案」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 経験の言語化とは、過去の経験を実況中継のように語ることである。
- イ 経験の言語化とは、過去の経験を反省しそこから情報を取り出すことである。
- ウ 経験の言語化とは、過去の経験の言語的物語りを作ることである。
- エ 経験の言語化とは、過去の経験を後に想起できる形に換えておくことである。
- オ 経験の言語化とは、過去の経験の記憶像を言葉で表現することである。

問八 空欄

Y

 に入る最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア 過去経験が言語的に表現される
- イ 言語的に物語るために努力する
- ウ 想起により過去経験を再生する
- エ その想起が過去経験を制作する
- オ 初めて現在経験として知覚する